

# 生物多様性国家戦略の見直しに関する懇談会 第6回会合（発言概要）

平成19年2月5日 14:00～17:00

出席委員：石坂座長、岩槻委員、小野寺委員、中道委員、林委員、鷺谷委員

ゲストスピーカー：国立環境研究所 竹中明夫氏、総合地球環境学研究所 湯本貴和氏

（地球温暖化と生物多様性）

- ・温暖化などの環境変動への生物の対応は、適応進化と移動と絶滅の3つ。適応進化については、世代時間が短いものが適応能力が高く、侵略的な外来生物、病原菌、害虫、一年生草本などが増加しやすい。体が大きく世代時間が長い哺乳類や絶滅危惧種は環境変化に弱い。
- ・寒い時代に大陸から入ってきた生物は、草原や雑木林の人間による管理により生き残ったが、近年の管理不足で種の存続が困難になっており、それが一層進行する可能性がある。
- ・暖かい地方の米作で単位面積当たりの農薬使用量が多いように、温暖化により農薬使用量が増加することも考えられる。
- ・戦略として重要なのは、個別の種への対応というより、温暖化が生態系にどう影響があるかを掴むこと。その際にも、科学的データをもとにストーリーをつくるのが大事。
- ・温暖化に伴う分布変動については、研究者でなくても情報は収集できる。集めた上で検証するという姿勢で多くのデータを集めることが大切。
- ・生態系のコリドーについては、温暖化に伴う移動を助けるためというより、人間がつながりを分断してきたものを元に戻すという考え方が重要。
- ・温暖化による降水量の変化で、水田、河川、海水濃度などが変わること、生物の移動が妨げられるなどの水の変化による影響についても整理すべき。
- ・生物多様性の保全には、生物そのものの保全と人間との関係性の中での保全の2つの観点があり、温暖化と生物多様性を論ずるのであれば、あらためて生物多様性のそうした理念・哲学について再整理が必要。
- ・温暖化と災害の関係は非常にわかりやすいが、温暖化と生物多様性についてはわかりにくい。サンゴやホッキョクグマの例など一般の人でもわかる事例を集める努力とともに、絶滅などが具体的に生活にどう関わってくるのかを大胆に説明しないと切迫感が感じられない。

（超長期的に見た国土の自然環境のあり方）

- ・かつては珍しくなかった種が生態系が変化して絶滅危惧種となったものは環境や生態系の指標としての意義がある。絶滅危惧種となった背景からグループ分けした上で、どう回復させるかという視点が重要。
- ・氾濫原という水の攪乱は、新田開発という資源利用や管理など人の攪乱によって代替されてきた。今後の国土を考えると、そうした氾濫原ウェットランドという考え方も必要。
- ・100年前里山は3500万人できれいに維持されていた。エネルギー革命でだめになったものを維持するとすると、バイオマスエネルギーと関係させるのか、それとも国土のあり方という視点でいくのか、考え方をはっきりさせることが必要。
- ・科学的データなしに目標を立てることは問題。モニタリングしつつ、随時、目標を修正するという姿勢が必要。絶滅危惧種はモニターする上での指標として重要で有効に活用すべき。
- ・里地里山は、何のために必要か、人口減少下でどの程度手を入れればよいのかを具体的に示さなければ保全は難しい。
- ・国土の自然環境のあり方というときには、面積の大きい人工林や河川、ため池などの開水面についても触れなければならない。
- ・農業の担い手が減っていく中で、里地里山を守る人を増やすためには、GDPに代わるブータンのGNH（Gross National Happiness）など新しいものさしが必要。
- ・ツルのモニタリングを鹿児島の中学校在っている例のようなボランティアなモニタリングシステムの充実が重要。
- ・温暖化の観点だけだと、例えば若齢の森林の方が吸収力が高く原生林や里山の保全は相対的に価値が低いということになりかねない。生物多様性を温暖化と等価値に置くことが必要。
- ・日本での戦後の変化は世界でも例を見ない速さであり、それが今になって生態系変化として顕在化している。欧米にはない過去をしっかりと見ることによって生物多様性の価値や処方箋が見えてくるのではないかと。
- ・過去と対比する場合、日本人の自然観の移り変わりを整理することも重要。
- ・温暖化との関係で長期的な国土のあり方を考える場合には、温暖化によって生態系がどう変化するのか、何種くらい絶滅するのかなど、具体的な「2050年イメージ」も必要ではないかと。
- ・農地や森林が放棄地や荒地となっていることを生物多様性の視点からどう捉えるのか。他省の所管のことでなかなか書けなかった分野だと思うが、それをとりこんだ戦略にして欲しい。